

手話の世界も奥が深い

榎戸 友子

今回まず、画面越しではありますが、とにかく明るい表情で手話をされる方だなと思いました。そして、皆さんも言っていましたが、手話通訳者さんがとても上手でひきこまれるようにお話をお聞きできました。

最近はAIが進歩しているので、文字化するのも簡単だろうと思っていましたが、専門用語の壁には気づきませんでした。手話も医療機関では専門の知識が必要なのですね。

そして、聴覚障害者に健康への情報を提供することの難しさを知りました。他の障害者に比べて自力で医療機関へ行けるし、筆談もできるから医療機関にかかることには何の問題もないと思っていた。確かに筆談ではたくさんの情報は得られないですし、いかにいつも聴覚情報に頼って生活しているのだなと実感しました。

聴覚障害の方は外見から見たら気がつかないので、自分から配慮を求めるというのは非常に気疲れするし大変なことでしょう。自分から言わずには過ごしてしまうのもよくわかります。

それほど検信率に有意な差があることには驚きました。とにかく受診ハードルが上がってしまうのは命に関わることなので早急に対応してほしいものです。医療専門の手話通訳など養成していく必要があるのですね。

私は全く手話はできませんので、大学時代の聴覚障害の方ともコミュニケーションをとることができなかつたことが残念でなりません。とにかくどう接していいのかわからなかつたのです。視覚障害や他の障害者の方を手伝う機会があったので、きっかけはつかみやすかったのはあります。

先生の明るさが障害を持っても楽しく生きられると感じました。